〈巻頭言〉

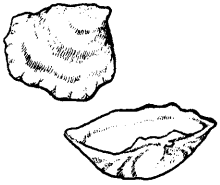
幼児教育の生々

青木　久子

いつの時代も、幼児教育は純情なる人々の情熱によって支えられ発展してきた。生活によって自己陶冶するというその教育の方法は、余りにも高尚で本質的なるが故に、また対象が幼いが故に、教えることを旨とする学校教育からは特別視され、世間からは軽んじられるのであろうか。「保育料は駐車料金と同じ?」、それが、一般社会の保育価値に対する評価とすると、日本の保育に対する意識は余りにも貧しすぎはしないかと思うのである。

しかし一方で、〝真実〟とはささやかな見えにくい営みの中にあるのかもしれないとも思う。保育を女性に依存してきた男性中心の社会は、保育システムを社会の下位に位置付けてきた。こうして置かれた保育界の状況がハングリーなだけに、一人一人の情熱がこれを支え、曇りない目で社会を見るのだろう。

宗像誠也が「教師と子供の接触の機微――これが教育の本質である」とした戦後の民主主義教育の出発が、いつしか高度成長の波に巻き込まれ、教師と子供の関係を上下にし、接触の機微の中から人間の



生き方を伝え合う時を奪っている。

次の時代、戦後、私たちが求めた物質的な豊かさのつけを払うために、保育者も保護者も、あるいは地域の人々や行政も手を携えて、新しい生活世界を創造しなければならない。その時、〝子供から出発する幼児教育〟の実践の質が問われるのだろう。

それは、幼児教育の基本である「環境を通して行う」という理念をどう実現するかということである。一つは、幼児の生活や遊びを充実するための園の環境作り、環境としての保育者の接触の機微の在り方というミクロな視点と、もう一つはそれぞれの土地に根ざした教育の生々というマクロな視点から、保育の再考が始まるに違いない。昨今の地方自治の活性化、教育・福祉の民営化という声は、地域共同体の生々と保育の生々をからめて進行していくだろう。もともと保育は地域の自然や文化、人々の暮らしと一体となって営まれてきたものである。その地域社会の環境が保育の内容をつくってきたと言っても過言ではない。「わが温泉町は、すべての必要とする幼児に福祉と教育を保障する」「保育園、幼稚園、小学校、地域社会の人々が共に複合施設で学び合い助け合う生活から、町づくりが始まる」、そんな意識のわが町、わが村の保育を語る方々にお合いするようになった。

教育が、地域社会の個性の発揮から始まり、家族全員が生々自生する生活作りから創生すると思うと、また新しい期待がわいてくる。そして、こうした変化の激しい時代、どうせ流されるなら、その流れの中で幼児教育の本質だけはしっかりつかんで離さないという、実践者の自負と責任をもちたいと思うのである。

（青木幼児教育問題研究所主宰）